

西新町遺跡10

－第19次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第984集



遺跡略号 NSJ-19

調査番号 0632

2008

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、本市におきましてはこれらの保護と活用に取り組んでいるところであります。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていることも事実です。本市教育委員会では開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存に努めています。

本書は、共同住宅建設に伴い調査を実施した西新町遺跡第19次調査の成果を報告するものです。今回の調査では弥生時代の集落跡を確認すると共に、多数の土器や石製品が出土しました。これらは、当時の西新地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地権者をはじめとする多くの方々の御理解と御協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会

教育長 山田裕嗣

例　　言

1. 本書は共同住宅建設に伴い、早良区高取1丁目111、112において発掘調査を実施した西新町遺跡第19次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いた方位はすべて磁北である。
3. 本書で使用した遺構の呼称は、竪穴住居をSC、土坑をSK、ピットをSP、土器溜まりをSXと略号化している。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は今井隆博が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は平川敬治、今井が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は牛尾功仁子、今井が行った。
7. 本書に掲載した遺構・遺物の写真撮影は今井が行った。
8. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
9. 本書の執筆・編集は今井が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 遺構と遺物	4
第4章 まとめ	19

挿図目次

第1図 西新町遺跡位置図(1/25000)	
第2図 調査区位置図(1/1000)	
第3図 調査区全体図(1/100)	
第4図 調査区東壁土層図(1/60)	
第5図 SC01・02・04・05・07・09実測図(1/60)	
第6図 SC04・05・07・09出土遺物実測図 (1/4・1/3)	
第7図 SC10・15実測図(1/60)	
第8図 SC10・SP16出土遺物実測図(1/4・1/3)	
第9図 SC15出土遺物実測図(1/4)	
第10図 SK08・18実測図(1/40)	
第11図 SK08・18出土遺物実測図(1/4・1/3)	
第12図 ピット出土遺物実測図(1/4)	
第13図 SX26遺物出土状況実測図(1/30)	
第14図 SX26出土遺物実測図①(1/4)	
第15図 SX26出土遺物実測図②(1/4)	
第16図 SX26出土遺物実測図③(1/4)	
第17図 SX26出土遺物実測図④(1/4・1/3)	
第18図 2区包含層遺物出土状況実測図(1/30)	
第19図 2区包含層出土遺物実測図(1/4・1/3)	
第20図 その他の出土遺物実測図(1/4)	
第21図 近世資料実測図(1/6・1/4)	
第22図 弥生中期後半住居址配置図(1/500)	

図版目次

図版 1	
1. 1区全景（東から）	
2. 2区全景（南から）	
図版 2	
1. SC01（東から）	
2. SC02（東から）	
3. SC04（東から）	
4. SC07（東から）	
5. SC09（南東から）	
6. SC10（東から）	
図版 3	
1. SC10遺物出土状況（西から）	
2. SP16遺物出土状況（東から）	
3. SC10完掘状況（東から）	
4. SC15（西から）	
5. SX26遺物出土状況（北東から）	
6. 2区包含層遺物出土状況（西から）	
図版 4	
出土遺物 I	
図版 5	
出土遺物 II	
図版 6	
出土遺物 III	

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成18年5月31日、讃井龍生氏より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下、埋文課）に対して、福岡市早良区高取1丁目111、112における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けて埋文課では、申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である西新町遺跡に含まれていることから、平成18年5月15日に確認調査を実施した。その結果、現地表下約140~230cmで遺物包含層もしくは遺構を確認した。この結果に基づいて申請者と埋文課は協議を行い、遺構の破壊が避けられない建物部分を対象として、記録保存のため発掘調査を実施することで合意した。その後委託契約を締結し、平成18年7月12日から同年8月11日まで発掘調査を実施した。整理作業と報告書の刊行は平成19年度に行なった。なお、発掘調査・資料整理の経費の一部について、国庫補助金適用要項に基づき国庫補助金を適用した。

調査番号	0632	遺跡略号	NSJ-19
調査地地籍	早良区高取1丁目111、112	分布地図番号	荒江72
開発面積	238.48m ²	調査実施面積	163.48m ²
調査期間	2006.7.12~2006.8.11	事前審査番号	18-2-51

2. 調査の組織

調査委託：讃井龍生

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括：埋蔵文化財第2課 課長 力武卓治

同課調査第1係長 池崎譲二（前任） 杉山富雄（現任）

調査庶務：文化財管理課 後藤泰子（前任） 井上幸江（現任）

事前審査：埋蔵文化財第1課事前審査係 松浦一之介（前任） 藏富士寛（現任）

調査担当：埋蔵文化財第2課調査第1係 今井隆博

調査作業：阿比留忠義 有江笑子 岩永いさ子 上野道郎 梅野真澄 海津宏子 金子由利子
菅野武 木田ひろ子 栗木昭孝 柴田勝子 柴田春代 鳴啓子 須佐恵司 田中昭子
辻節子 徳永洋二郎 西川吾郎 古庄孝子 松本順子 三谷朗子 吉積百合子
脇山千代美

尚、発掘作業から報告書作成に至るまで、讃井龍生様・シティクリエイト建設をはじめ地域住民等関係各位には多大な御協力と御理解を頂きました。記して感謝する次第です。

第2章 遺跡の立地と環境

西新町遺跡は早良平野の東北端に位置する。早良平野は中央を室見川が北流し、これと十郎川・樋井川などの冲積作用により平野が形成されている。また室見川河口両岸には愛宕山、五塔山、龜原山などの第三紀の独立丘陵が存在する。海浜部には博多湾の左転海流により形成された弓状砂丘が存在する。この博多湾岸に広がる砂丘は箱崎砂層と呼ばれ、箱崎、馬出、吉塚、堅粕、博多中洲、天神、荒戸、地行、西新、藤崎、姪浜と続き、福岡市の主要な都市部のほとんどを占める。砂丘全体の海岸部には元寇防塁が東西方向に伸びており、現在は生の松原、小戸、西新等の地区で調査・保存されている。これらの砂丘は繩文海進期から形成され始め、海蝕では中世まで砂丘の形成が続いている。

西新町遺跡が位置する砂丘は東を樋井川、西を金屑川に画され、北側を博多湾、南側は室見川等が形成する後背湿地に挟まれた東西1400m、南北300mの細長い形状を呈する。西新町遺跡はこの砂丘上で県立修猷館高校を中心として東西800m、南北300mに広がり、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落遺跡と弥生時代の壇棺墓地からなる。集落は弥生時代中期後半に遺跡南西部からみられはじめ、古墳時代初頭には修猷館高校周辺に大規模に展開する。飯蛸壺や石錘など漁村的な遺物が出土する一方で、鉄器や朝鮮半島系土器、畿内・山陰系土器が多く出土すること、国内でも早い時期の籠の受容などから対外交流の拠点であった様子も窺える。

西新町遺跡の西側には浅い谷を挟んで藤崎遺跡が存在している。藤崎遺跡は地下鉄藤崎駅周辺に広がる遺跡で、弥生時代の壇棺墓や古墳時代の方形周溝墓、土壙墓、石棺墓などの墓地構造が多数確認されており、方形周溝墓からは船載鏡をはじめとした貴重な遺物が出土している。

藤崎遺跡から室見川を挟んで西側に連なる砂丘上には姪浜遺跡があり、弥生時代中期から後期の壇棺墓と古墳時代前期までの集落が確認されている。出土遺物には石錘、製塙土器などの生産関係遺物、南海産の貝製未製品・貝玉、朝鮮半島系無文土器、漢式系三翼鏡などの外来資料が多く、西新町遺跡と類似した様相が窺える。

西新町遺跡ではこれまで22次にわたる発掘調査が実施されている。これまでの成果によると、弥生時代中期後半の集落は第16次地点を西限とし、第8次地点までの東西約150mの範囲に展開している。当該期の土器・漁撈具以外に、第8次調査ではガラス容器片・合鉄精鍊鍛冶滓・朝鮮半島系無文土器が、第9次調査では板状鉄斧、第16次調査では国内最古のトンボ玉など、特筆すべき遺物が多数出土している。遺構は竪穴住居址、土坑、土器溜まり等からなる。直径9.6mの大形円形住居が検出されている第9次地点付近が弥生中期の集落の中心地と思われる。

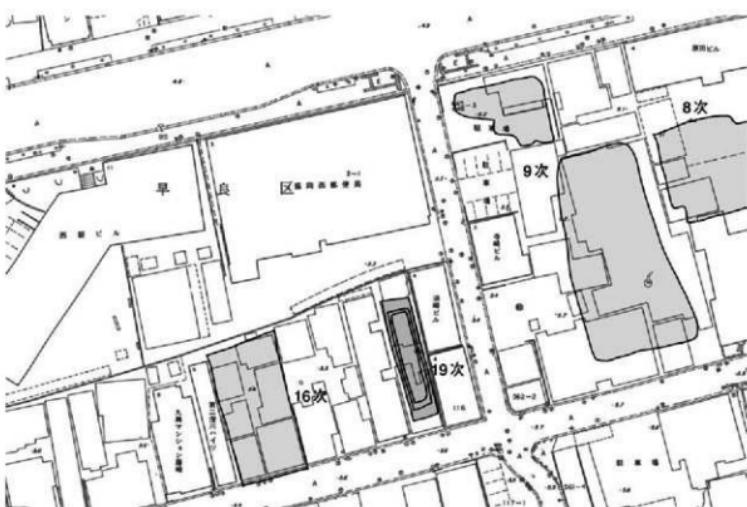
弥生時代中期の墓群は修猷館高校グラウンドから南側の道路付近に展開し、第1・2・7・10・18次地点で確認されている。第2次調査では壇棺からゴホウラ製貝輪や銅劍切先が出土した。第10次調査では中期後半の成人棺から頭蓋骨を欠く人骨と、その直上の小形棺から頭蓋骨のみが出土するという特異な埋葬法が見られた。第10次地点の南側の第18次地点でも北端で壇棺が1基確認されているが、第18次地点に隣接する第21次地点では確認されず、壇棺墓の分布範囲がある程度判明してきた。

弥生時代終末期から古墳時代前期には、第8次地点を西限に第5次地点にかけて集落が確認され盛期を迎える。修猷館高校校舎改築に伴う福岡県教育委員会の一連の調査では、甕を伴う竪穴住居址が多数検出され、近畿・山陰系や朝鮮半島系土器が多数出土するなど外来系文化の流入が窺え、またガラス玉鑄型や碧玉未製品など生業関連遺物の出土なども特徴的な様相を示している。

その後は古墳時代後期の遺構がわずかに確認される程度である。第9次調査では副用品をもつ土壙墓が、第18次では土坑が検出されている。近世以降になると高取焼関連の遺物が多く出土する。



1. 西新町遺跡 2. 藤崎遺跡 3. 筑前探題路 4. 鳥飼道路
第1図 西新町遺跡位置図 (1/25000)



第2図 調査区位置図 (1/1000)

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

今回の調査地点は西新町遺跡の南西端付近に位置する。北側には地下鉄工事に伴う第2次地点、東側に第8・9次地点、西側には第16次地点がある。過去の調査から、西新町遺跡の南西部は弥生時代中期後半の集落が、中央部以東は弥生時代終末～古墳時代前期の集落が広がることが判明している。本調査地点も弥生中期後半の集落が検出されることを予想して調査に着手した。

申請地は西新一藤崎間の商店街の中に入り、長さ35m、幅7mの狭長な範囲である。遺構面までは2m近くあることから、壁面崩壊を防ぐためにII鋼を打ち込み鉄板をはめ込みながら掘り下げた。鉄板から引きをとり傾斜をつけて掘り下げたため、長さ20m、幅4mのトレンチ状の調査となった。調査区の北半を1区、南半を2区とした。表土剥ぎの際の廃土と1区掘削時の廃土は場外に搬出し、2区掘削時の廃土は場内で処理した。

基本層は地表面（標高約5.3m）から-70cmまでが暗灰褐色土、-110cmまでが茶褐色砂、-140cmまでが黄褐色砂、-230cmまでが黒褐色砂で遺物包含層、-230cmからが地山の明黄褐色砂である。当初包含層の上にある黄褐色砂を地山と誤認し検出作業に入ったが、擾乱除去の際に黄褐色の下で黒褐色砂を確認したため、再度重機を入れて掘り下げた。黒褐色砂下層には遺物が多量に含まれることから遺構は包含層中から掘り込まれているものと思われるが、土質の区別が全くつかず地山の明黄褐色砂を遺構面とした。遺構面は南から北に緩やかに下がり、標高は南側で3.4m、北側で3.0mである。

検出した遺構は弥生時代中期後半～末の住居址8軒、土坑2基、ピット約20と土器溜まり1ヶ所である。ほとんどの遺構が調査区外に広がっているためはっきりしないものが多い。遺物は当該期の土器が大量に出土しており、丹塗りの祭祀土器も多い。その他に石錘や黒曜石片も出土している。また、表土剥ぎの際に江戸時代の高取焼などを採集した。遺物の総量はコンテナケース約30箱であった。

2. 遺構と遺物

①堅穴住居址(SC)

SC01 (第5図、図版2-1)

調査区北端付近で検出した。西側はSC04に切られるため東西長は不明であるが、現存で南北2.3m、東西1.8mの方形住居である。深さは10cmで遺存状況は悪い。北東隅と南東隅に柱穴が1.8m間隔をとって設けられており、主柱穴は4本と思われる。中央やや北寄りには炉と思われる焼土が確認された。遺物は弥生土器小片が数点出土したのみである。

SC02 (第5図、図版2-2)

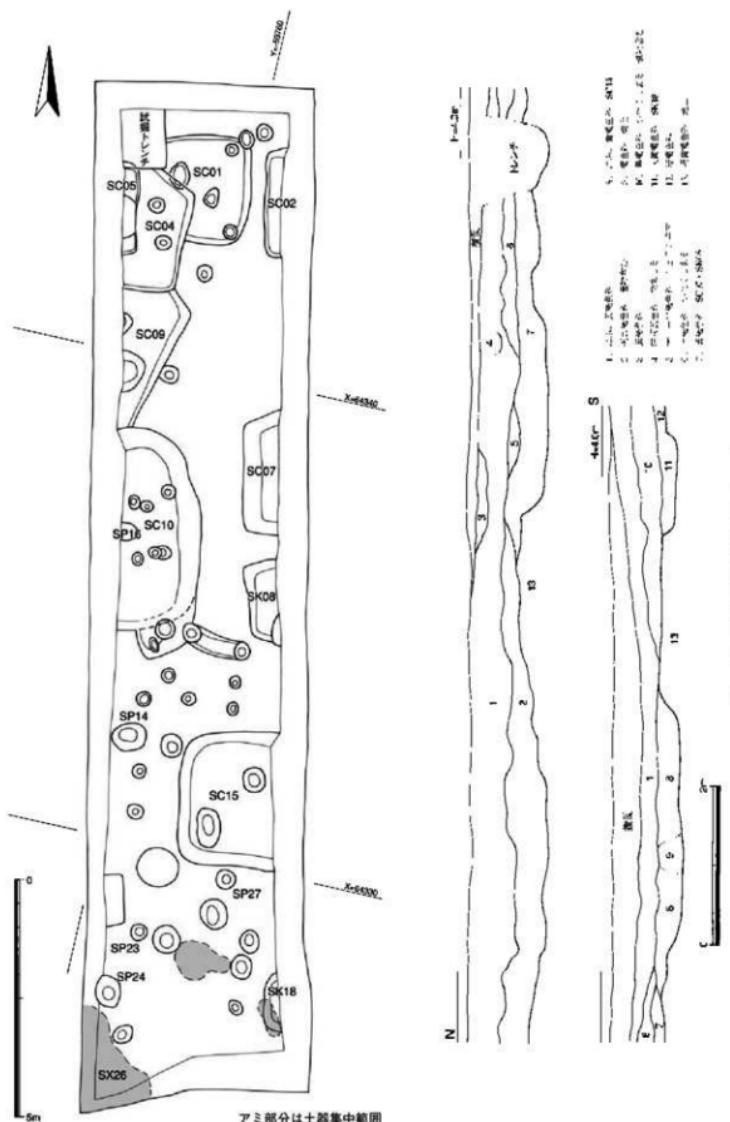
SC01の東側で検出した。現存で南北2.3m、東西0.4mの方形プランで、深さ10cm。覆土は明瞭な黒褐色砂ではなくシミのようにも見え、遺構かどうか疑問が残る。弥生土器片が少量出土している。

SC04 (第5図、図版2-3)

SC01を切り SC05・09と重なるが、切り合い関係を把握することができなかった。現存で南北2.7m、東西1.6mの方形である。深さ15cmを測る。柱穴を2つ確認したが主柱穴は不明である。図示したものは、SC05・09・10との切り合い関係が不明であったため全体を掘り下げている際に出土した土器ばかりで、明確にSC04に伴う遺物ではない。帰属は不明であるが、都合上ここで報告する。

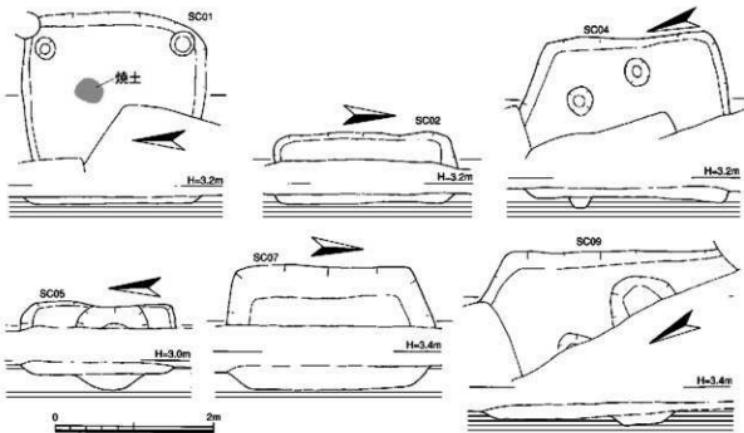
出土遺物 (第6図)

1・2・7は全てSC04・05・09・10のいずれかから出土したものである。1は逆L字状の甕の口

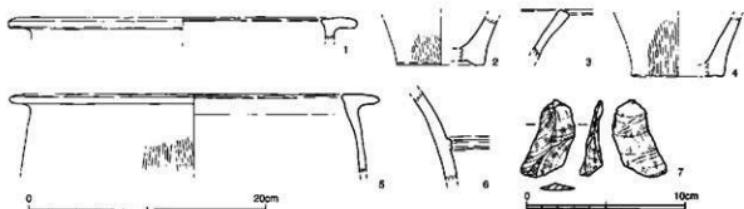


第3図 調査区全体図 (1/100)

第4図 調査区東壁土層図 (1/60)



第5図 SC01・02・04・05・07・09実測図 (1/60)



第6図 SC04・05・07・09出土遺物実測図 (1/4・1/3)

縁部である。2は壺の底部である。やや上げ底で、外面にはタテハケを施す。7は黒曜石剥片である。使用痕と思われる剥離が見られる。

SC05 (第5図)

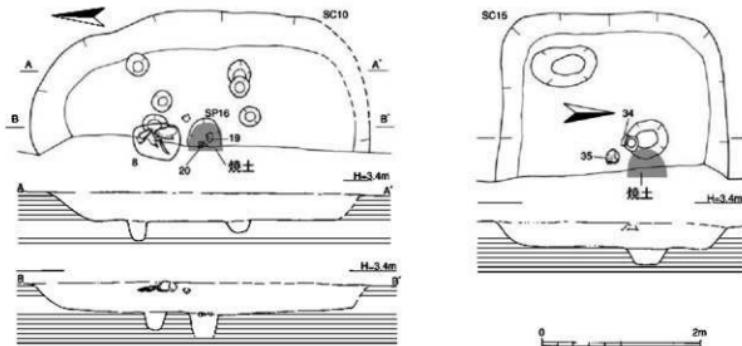
SC04と重なる。現存で南北2m、東西0.35mの方形プランで、深さ20cmを測る。中央付近には長さ90cm、深さ20cmの窪みがある。切り合い関係が不明なうえ規模も小さく、住居址かどうか疑問が残る。

出土遺物 (第6図)

3は壺の口縁部であろうか。小片のため径は復原できない。内外面ともナデ調整。4は壺の底部で、外面にはタテハケを施す。

SC07 (第5図、図版2-4)

調査区中央や北寄りの東壁沿いで検出した。調査区外に延びる。現存で南北2.6m、東西0.8mの方形プランである。深さ30cmを測る。SC02と同様の覆土で、明瞭には識別できない。弥生土器片が少量出土している。



第7図 SC10・15実測図 (1/60)

出土遺物（第6図）

5は壺の口縁部で、鋤先状の口縁を有する。復原口径は31cm。外面には粗いタテハケがわずかに残る。6は壺の胴部でM字突帯を貼り付ける。外面にはヘラミガキ、内面はナデ調整である。

SC09（第5図、図版2-5）

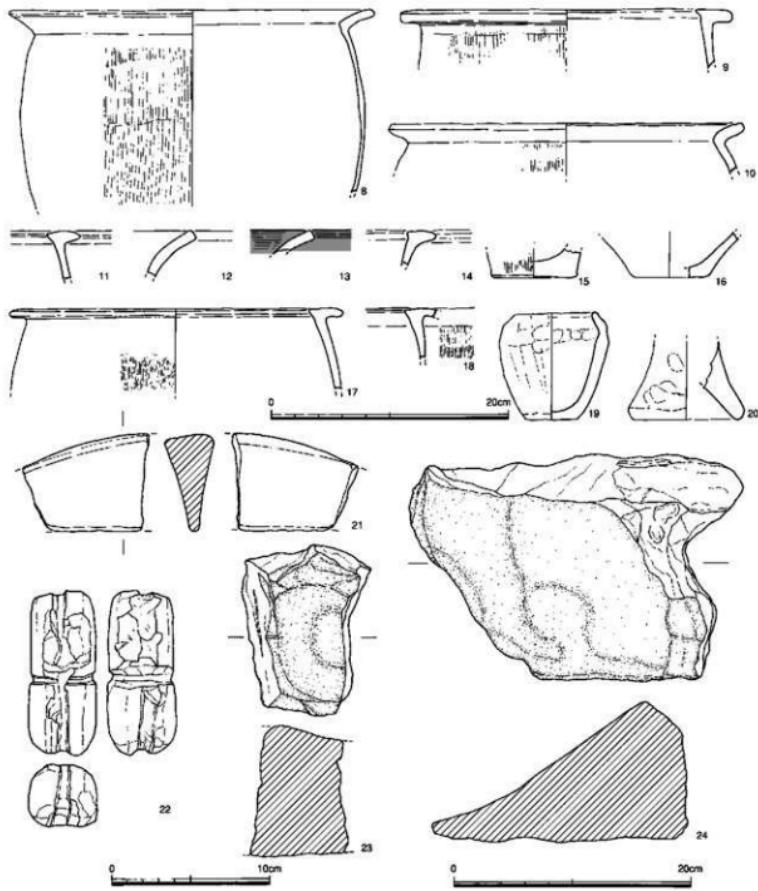
SC04・10と重なるが、切り合い関係を把握することができなかった。現存で南北3.0m、東西1.6mの方形プランである。一角だけを検出した。深さ20cmを測る。出土遺物はSC04・05・10を同時に掘り下げた際の土器のみである。

SC10（第7図、図版2-6、3-1-3）

調査区中央の西壁沿いで検出した。調査区外に延びる。当初南隅が別の遺構と切り合っていることに気づかず掘り下げてしまったため、プランの南端は推定復原である。規模は南北4.25m、東西1.7mで、平面形は隅丸方形とも円形ともとれる。深さ40cmを測る。床面でピットを検出したが、いずれも径が小さいえに10~20cmほどの深さで、主柱穴としてよいものか判断に迷う。中央付近に焼土が見られ、その下にピット（SP16）を検出した。SP16は湧水と壁面崩落のため底まで確認できていない。検出面付近で壺（8）が破片でまとまって出土した。その他に壺・鉢・器台・砥石・石錘などが出土している。本調査区の住居址のなかでは最も遺物量が多い。

出土遺物（第8図）

8~11は壺である。8~10はいずれも外面はタテハケ、内面はヨコナデを施す。8は検出面付近でまとまって出土した。くの字口縁で、口径30.7cmを測る。9は逆L字形口縁の壺で、内唇部がやや張り出す。復原口径28cm。10はくの字口縁で、復原口径30cm。11は鋤先口縁の壺小片である。内外面ともヨコナデ調整。12~14は壺の口縁部片である。12は広口壺の口縁部で、剥落が著しいが内面にはミガキの痕跡が認められる。13も広口壺の口縁で、内外ともに丹塗りを施す。内面調整は横方向のヘラミガキである。14は鋤先口縁の広口壺で、粘土の貼付が明瞭に認められる。15は壺底部で、復原底径7.2cm。外面にはタテハケを施す。16は壺底部で、復原底径7cm。内外面ともにナデ調整である。21は細粒砂岩製の砥石で、両面を使用している。22は滑石製の有溝石錘で、長軸方向・短軸方向ともに溝が巡る。長さ10.4cm、幅4.3cm、厚さ3.8cm。24は大型の砂岩製砥石である。

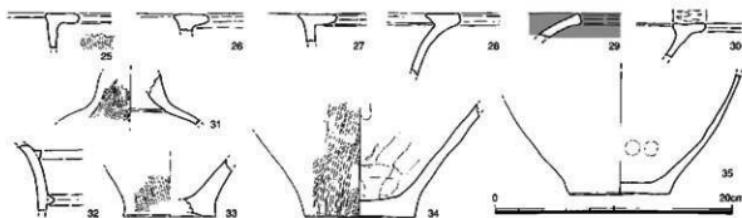


第8図 SC10・SP16出土遺物実測図 (1/4・1/3)

17~20・23はSP16から出土した。17・18は壺の口縁片である。19は鉢である。小片が接合したもので、ほぼ全体が復原できた。復原口径9cm。口縁部には指頭の痕跡が残り、口縁部より下は強い板ナデを縦に施す。内面は口縁部がヨコナデ、下部はナデ・ユビオサエである。20は器台である。内外面ともに指頭の痕跡が明瞭に残る。23は砂岩製の砥石である。側面に溝状の窪みがみられる。

SC15 (第7図、図版3-4)

2区東壁沿いで検出した。調査区外に広がる。現存で南北2.9m、東西2.0mの方形住居である。深さ30cmと遺存状況は良い。東壁沿い中央よりやや北側で炉と思われる焼土を確認した。柱穴、土坑を



第9図 SC15出土遺物実測図（1/4）

検出したが、主柱穴は確認できなかった。

出土遺物（第9図）

25~27は壺の口縁部である。25は逆L字の口縁で、外面にはハケ調整の際にできた粘土の高まりが残る。28は鋤先口縁の広口壺、29は素口縁の広口壺で、外面に丹塗りを施す。30は鋤先口縁の高杯で、口縁上面に暗文を施す。31は弥生終末期の高杯脚部である。外面はタテハケ、内面はナデで、内面には明瞭な段を有する。終末期の遺物はこの1点のみで、混入と思われる。32は壺胴部片で、三角突帯が二条めぐる。33・34は壺底部で、外面はタテハケ、内面はナデ調整である。35は壺底部である。器壁の荒れが著しく、調整不明である。胴下部から底部にかけて黒斑が見られる。

②土坑(SK)

SK08（第10図）

SC07の南側で検出した。調査区外に延びる。現存で南北1.75m、東西0.7mの方形土坑である。深さ20cmを測る。覆土はSC02・07と同様で、明瞭な遺構ではない。出土遺物は少量であった。

出土遺物（第11図）

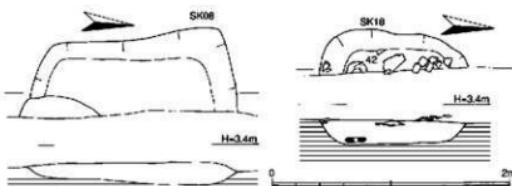
36は壺底部であろうか。外面はタテ方向のハケメ、内面は横方向のハケメである。図化し得たのはこの一点のみである。

SK18（第10図）

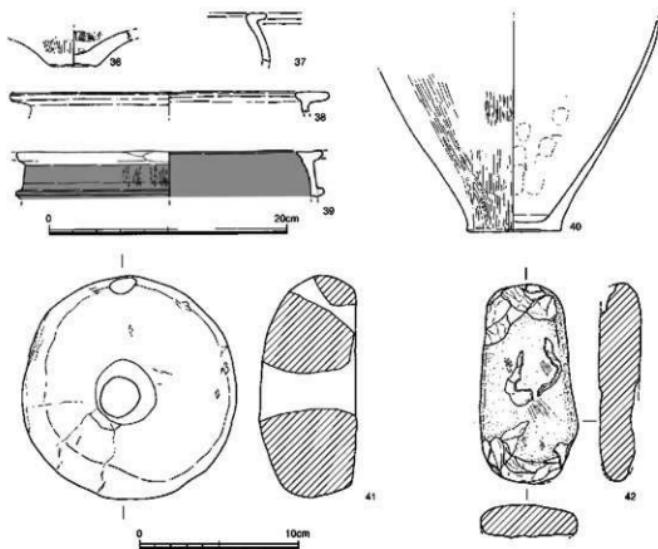
2区南端の東壁沿いで検出した。調査区外に広がる。現存で南北1.25m、東西0.35mの楕円形である。深さ20cm。検出面付近で遺物が多く見られた。底からは石錘が出土した。

出土遺物（第11図）

37は短頭壺口縁部である。器壁の荒れが著しく調整不明である。38・39は壺口縁である。38は鋤先口縁で、復原口径24.8cm。39は丹塗りを施し、丁寧に磨かれている。口縁端部を欠損。口縁下にコの字状突帯がめぐる。40は壺底部で、底部径8cmを測る。外面はタテハケ、内面はナデ調整でユビオサエの痕跡が残る。41は滑石製有孔石錘である。SK18の底付近で出土した。直径14cm、高さ6cm。ほぼ中心に穿孔され、最大孔径4cmを測る。側面に副孔を有する。42は玄武岩製の石斧未製品である。



第10図 SK08-18実測図（1/40）



第11図 SK08・18出土遺物実測図 (1/4・1/3)

刃部・基部を欠損し、裏面も約1/2が剥落している。側面には敲打の痕跡がみられる。敲石に転用したものであろうか。長さ12.5cm、幅6.1cm、厚さ2.8cmを測る。

③ピット出土遺物（第12図）

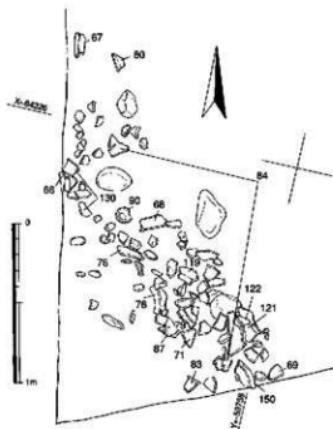
43～45は甕口縁部である。43はSP14出土、44はSP23、45はSP24からの出土である。46はSP27出土の壺胴部片である。三角突帯が一条めぐり、その上下にはハケメが残る。

④土器溜まり

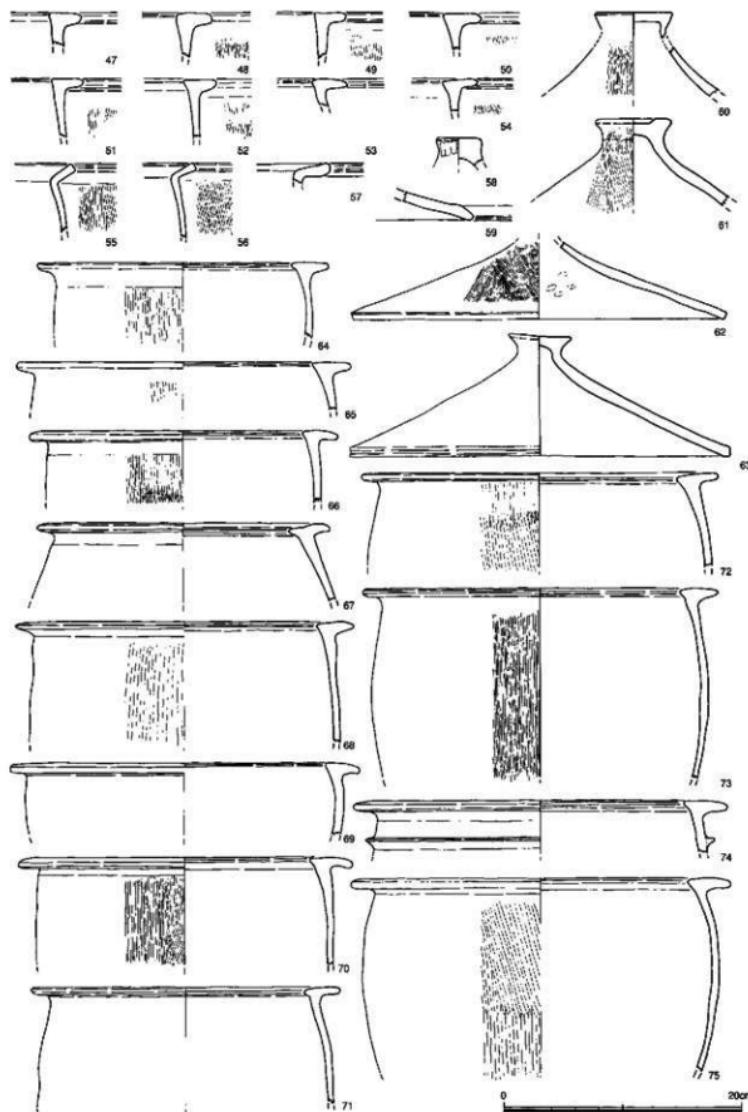
SX26（第13図、図版3-5）

調査区南西隅で確認した。表土剥ぎの際に包含層中で赤色砂を検出し、その付近で多量の土器を確認した。西側・南側は調査区外に広がる。土器集中部の厚さは20～30cmで、包含層におさまる。日常土器と祭

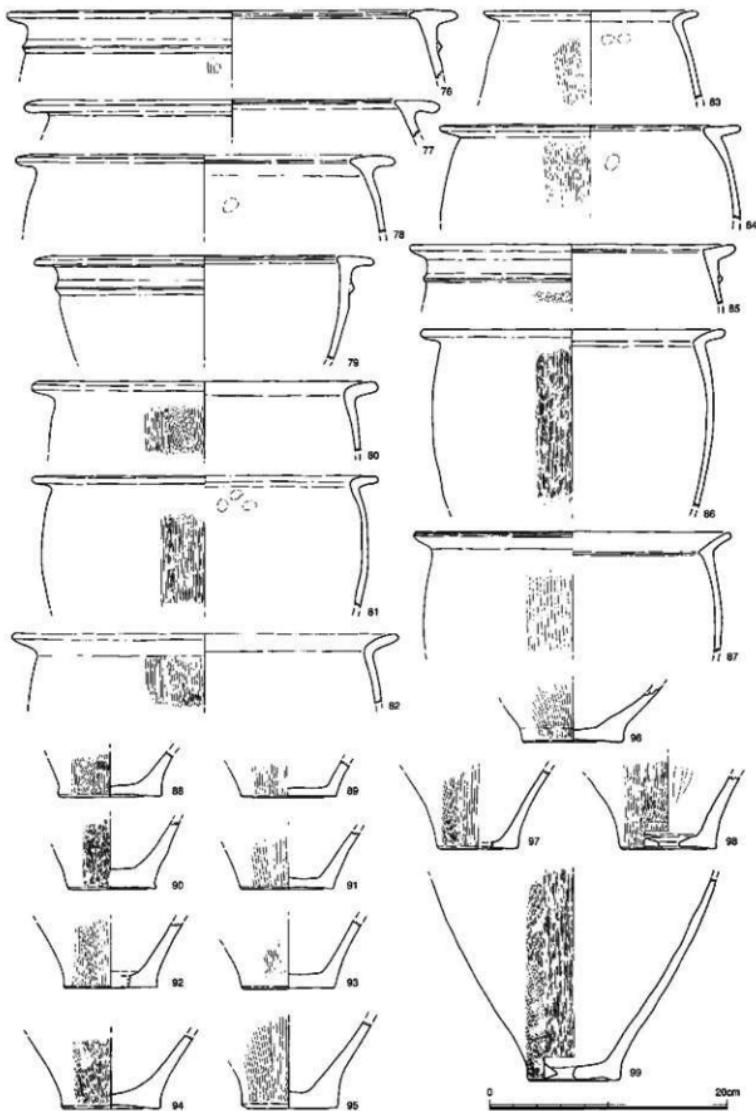
第12図 ピット出土遺物
実測図 (1/4)



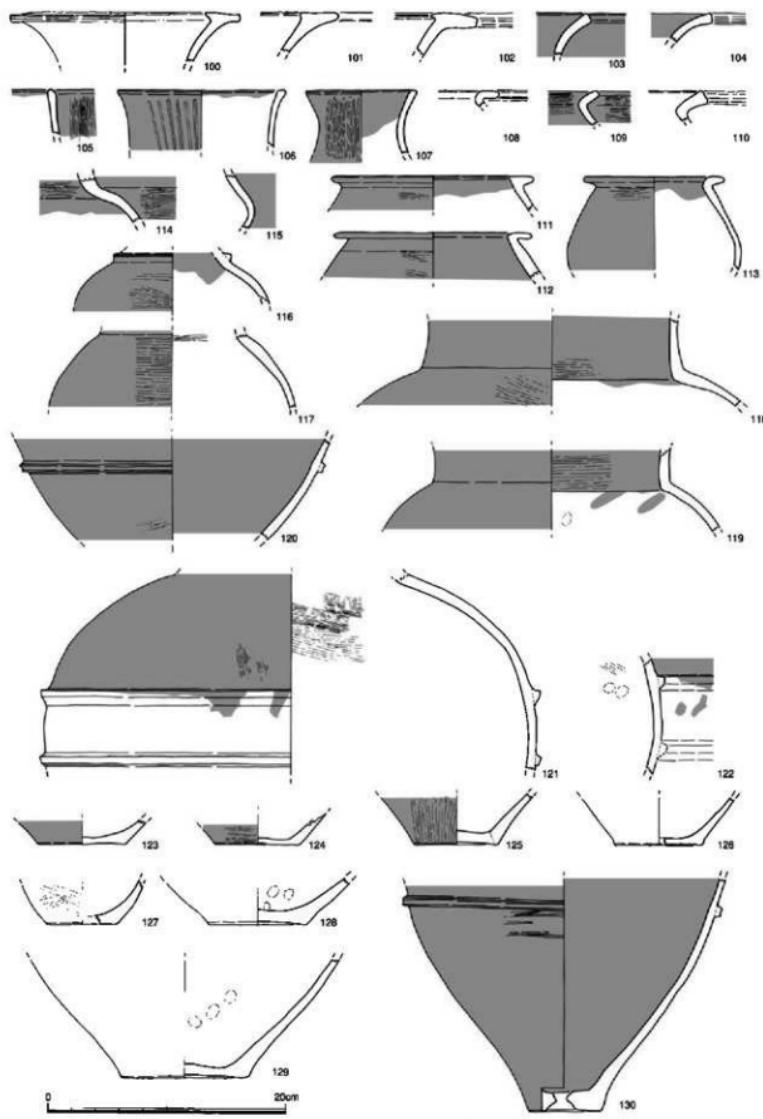
第13図 SX26出土遺物実測図 (1/30)



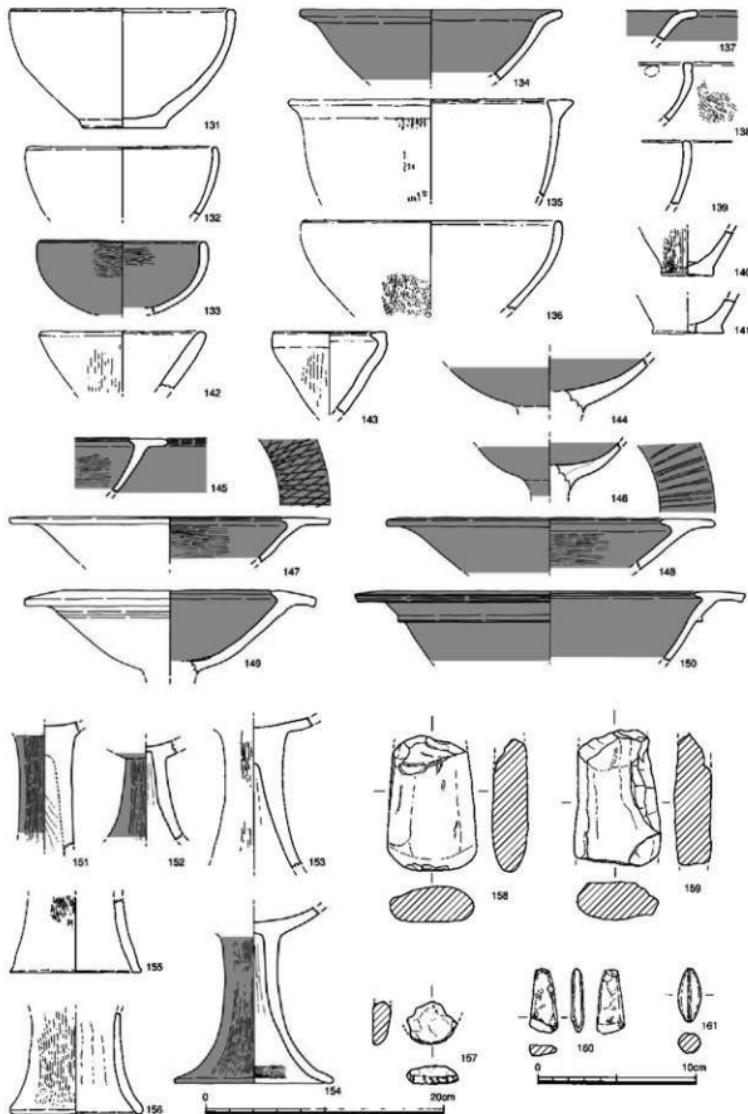
第14図 SX26出土遺物実測図① (1/4)



第15図 SX26出土遺物実測図(2) (1/4)



第16図 SX26出土遺物実測図(3) (1/4)



第17図 SX26出土遺物実測図④ (1/4 · 1/3)

祀土器が混じった状態で廃棄されており、土器集中部の下層付近には20~30cmほどの砂岩が数個みられた。遺物量は非常に多く、およそ2m×2mほどの範囲からコンテナケース10箱分以上出土している。

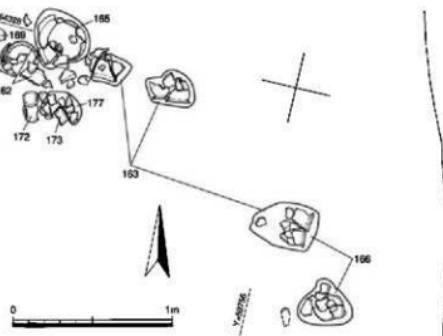
出土遺物（第14~17図）

47~57、64~87は壺の口縁部~胴部である。調整は基本的に外面はタテハケ、内面はナデである。55・56は跳ね上げ気味の口縁である。74・76・79・85は口縁下に三角突帯をめぐらす。口縁部形態は大きく分けて錫先形、逆L字形、くの字形の三種類である。87はくの字口縁で、内面に明瞭な段を有している。口径は25~30cmのものが多く、20cm以下の小型のものや35cm以上の大型のものも少量ある。88~99は壺底部である。いずれもタテハケ、内面はナデ調整である。底部径は8~9cmでまとまる。98・99は底部に穿孔がみられる。

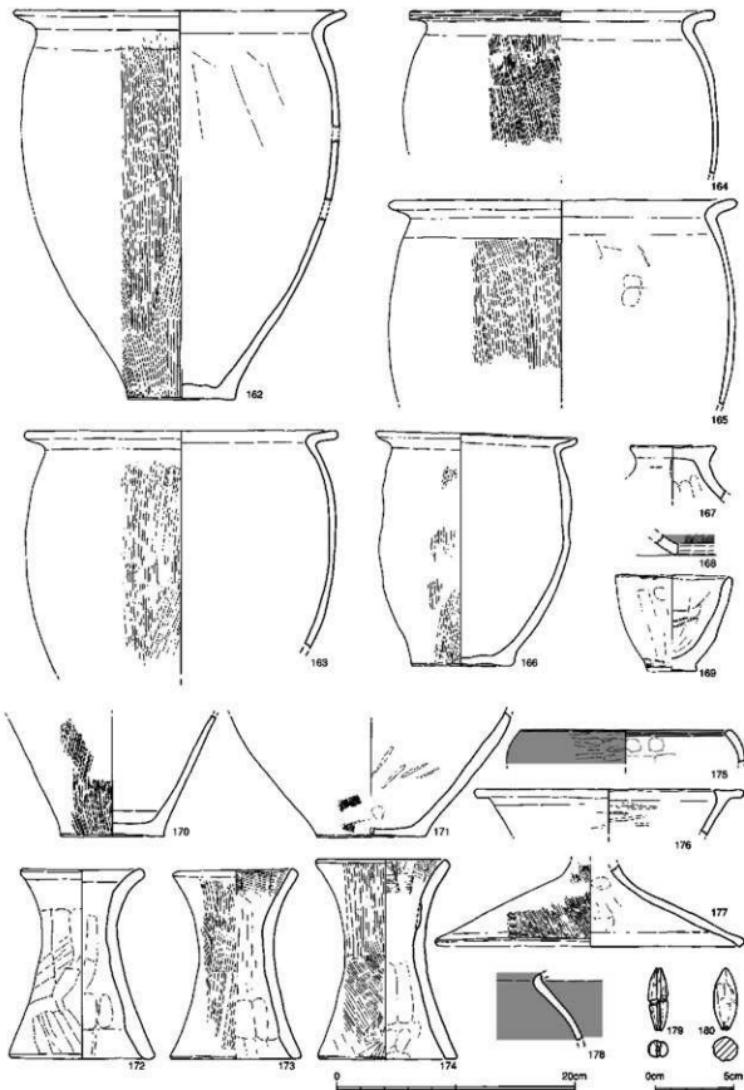
58~63は蓋である。58はつまみ部の小片で外面には指頭圧痕が見られる。60・61は口縁部を欠く。外面はタテハケ、内面はナデ調整である。62はつまみ部を欠く。復原口径31.5cm。外面はタテハケ、内面には指頭圧痕が残る。63は約2/3の残存で、復原口径32cmである。内外面ともナデ調整。

100~102は錫先口縁の壺で、いずれも内外面の調整はナデである。103・104は広口壺の口縁部で、ともに丹塗りを施す。105~107は直口壺の口縁部である。いずれも丹塗りで、外面にはヘラミガキを施す。106は復原口径14.2cmで、外面には二本単位の暗文が見られる。107は復原口径9.4cmで、外面は丁寧なヘラミガキを施す。108・109・111~113は短頭壺である。いずれも丹塗磨研土器である。114~120は丹塗りの壺胴部である。115以外はヘラミガキを施す。115は小型の壺で摩滅により調整不明である。116は頭部に三角突帯がめぐる。118・119はやや大型の壺で、復原頭部径は118が22cm、119は20cmである。120は胴の下部で、コの字突帯がめぐる。121は瓢形土器の胴上半部である。コの字突帯を二条めぐらす。突帯より上部には丹が塗られる。内面は横方向のハケメ調整である。122は121と同一個体と思われるが接合しない。123~130は壺底部である。外面は縦あるいは横方向のミガキ調整のものが多い。130は底部径6.2cm、残存器高19.8cmで、全面に丹塗りを施す。胴部にM字突帯がめぐり、突帯下にはミガキの痕跡がわずかに残る。底部には穿孔がある。

131~143は鉢である。131はほぼ完形で口径19cm、器高10cmを測る。133は内外ともに丹塗りで、口縁部には両面にミガキを施す。134はゆるいくの字口縁の鉢で、内外に丹塗りを施す。復原口径22.2cmである。136は直口縁の鉢で、復原口径22cmである。胴部下半には縦方向のハケメが残る。140・141は小型鉢の底部である。140は復原底径4.4cmで、外面調整はタテハケである。141は復原底径6cmで、外面調整は摩滅のため不明瞭である。ともに内面はナデ調整。142は外面はタテハケ後に口縁部をヨコナデ、内面はナデ調整である。器壁が厚く、他の土器とは雰囲気が異なる。復原口径は14cmである。143は口縁端部が内面に張り出す。復原口径9.4cmである。



第18図 2区包含層遺物出土状況実測図 (1/30)



第19图 2区包含层出土遗物实测图 (1/4·1/3)

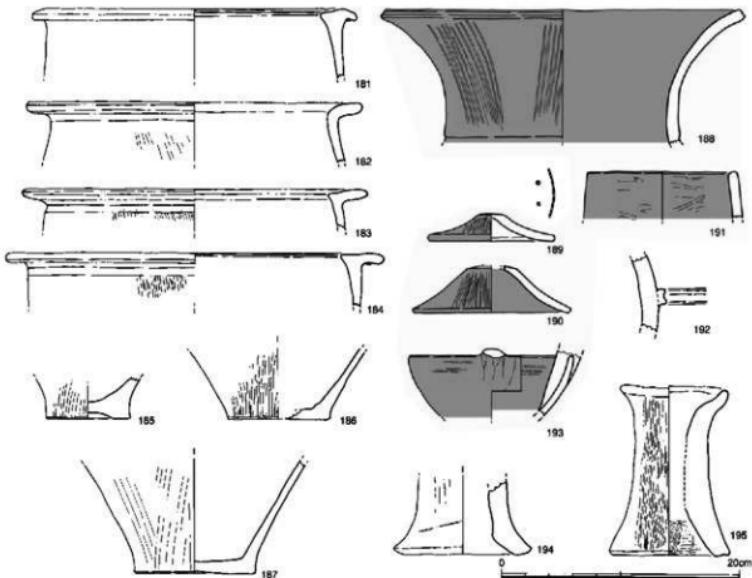
あるが、小片のため復原に不安が残る。

144~154は高杯である。147は復原口径27cmの杯部である。外面は剥落が著しく調整不明だが、内面は横方向のミガキ調整である。内面には丹が塗られている。口縁上面には斜格子状の暗文が施されている。148は復原口径27.6cmの杯部で、内外面ともに丹塗りである。外面の剥落が著しいが、調整は内外ともにヘラミガキである。口縁上面に二本単位の暗文が施されている。151~154は高杯脚部である。いずれも外面は縱方向のヘラミガキを施す。151は外面と杯部内面に丹が残る。脚部内面にはシボリ痕が明瞭に認められる。154は丹塗り土器で、脚部内面にシボリ痕とヨコハケが認められる。155・156は器台である。外面は縱方向のハケメ、内面はナデである。155の復原底径は11cm、156の復原径は11.2cmである。157は側面にキザミを有する扁平な土製品である。

158~160は石斧である。158は安山岩製の磨製石斧である。刃部の一部と基部を欠損する。残存長8.4cm、幅5.6cm、厚さ2.2cmである。159は玄武岩製の石斧未製品である。上下ともに欠損している。残存長8.5cm、幅5.4cm、厚さ2.4cm。160は小型の扁平磨製石斧である。頁岩製か。長さ4cm、幅1.7cm、厚さ0.7cm。161は滑石製の有溝石錐である。長軸方向のみに溝が巡る。長さ3.4cm。

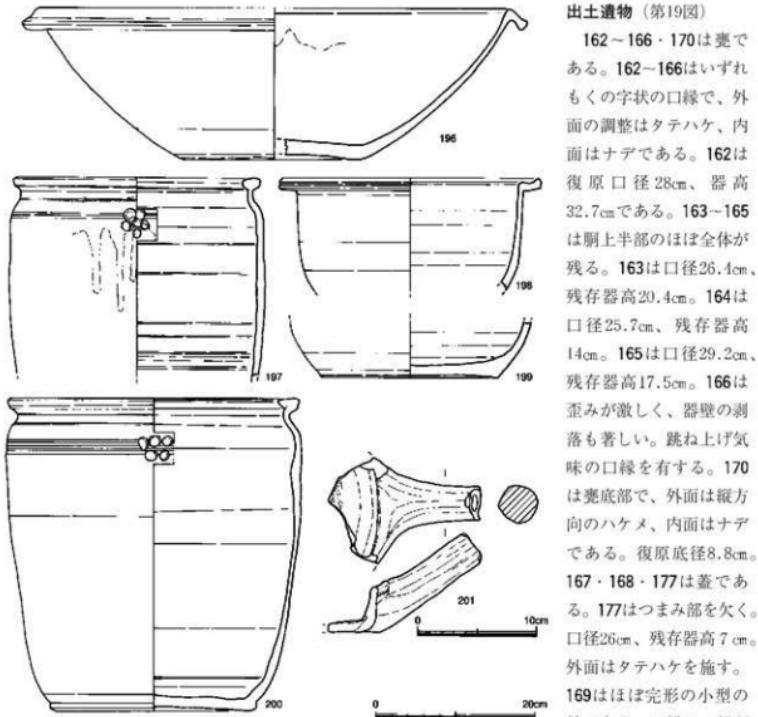
③2区包含層（第18図、図版3-6）

1区は重機で地山の黄白色砂まで掘り下がったが、2区では包含層中で止めて人力で掘り下げ、遺物の出土状況を確認した。SK18付近とその北西側に集中して出土している。163・166はほぼSK18の上に位置しており、本来この面からの掘り込みであった可能性もあるが、識別できなかった。



第20図 その他の出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（第19図）



第21図 近世資料実測図(1/6・1/4)

器高8cm。底部はコイン状の平底である。ナデ・ユビオサエの痕跡が明瞭に残る。171・176・178は壺である。171は壺の底部で、外側は縦方向のハケメ、内側には工具痕が残る。176は鋤先口縁の壺で、復原口径22.6cm。178は短頸壺の頸部である。器壁の荒れが著しいが、外側ともに丹塗りと思われる。172・174は器台で、土器集中部付近から出土した。いずれもほぼ完形に復原できた。受部径と器高はそれぞれ、172が受部径10.3cm、器高16cm、173が受部径10.5cm、器高16cm、174が受部径11.2cm、器高16.9cmと規格がそろっている。172はナデ調整で、173・174はハケ調整である。ともに内側に剥落部分が多い。179は滑石製の有溝石錘である。長軸・短軸ともに溝が巡る。長さ3.9cm、幅1.2cm。180は滑石製の石錘未製品である。長さ3.9cm、幅1.5cmである。

⑥その他の遺物（第20・21図）

表土剥ぎの際に採集したものや廃土採集の遺物をまとめて報告する。1区の包含層内遺物も混じっている。181～184は壺口縁部、185～187は壺底部である。188は広口壺の口縁部で、内外面に丹塗りを施し、外側には縦方向に10本程度を単位とした暗文がみられる。189・190は壺の蓋で、ともに外側

を磨いている。191は直口縁の壺か、あるいは脚付の鉢であろうか。内外面に丹塗りを施す。193は鉢のようであるが、把手のような円柱状の膨らみが一箇所みられる。口縁部よりも上方に伸びているが欠失している。杓子状土製品であろうか。内外面ともに丹塗りを施している。194・195は器台である。

196・201は表土剥ぎの際に採集した近世資料である。196は鉢で、復原口径63.4cm、器高19cmである。全面に黄褐色の釉が施される。197は壺で、復原口径31cm、残存高25cm。内外面は黄褐色釉を基本とし、口縁部、胴上半部に灰白色・綠灰色の釉が見られる。頸部下には円文が6つ施される。198は鉢で内外面ともに黒褐色の鉄釉を施す。復原口径32.8cm。199は鉢もしくは壺の底部である。内外面ともに赤褐色の鉄釉が施される。復元底径22.0cm。200は素焼きの壺である。復原口径36.5cm、器高39.3cm。197と同じく頸部下に円文を施す。201は十能である。全面ナデ調整。トチン・ハマなどの窯道具は出土していない。

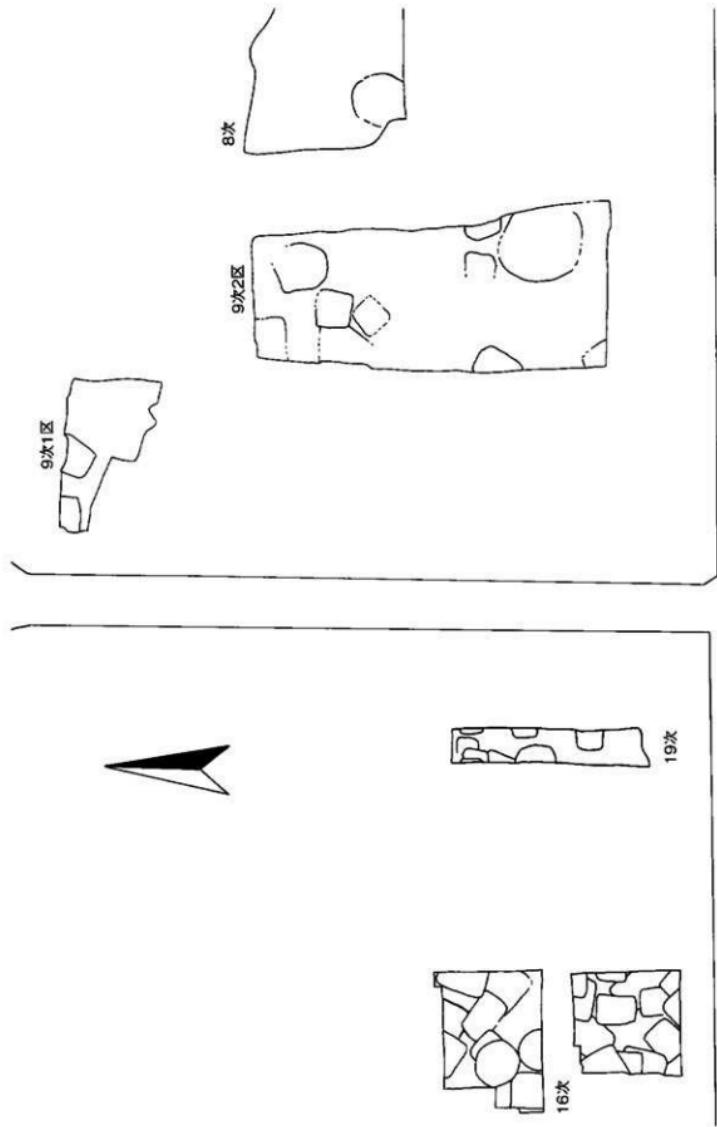
第4章　まとめ

今回の調査では周辺の第8・9・16次調査に統いて弥生時代中期後半～末頃の集落を確認した。検出した遺構は堅穴住居址8軒、土坑2基、ピット、土器溜まり1ヶ所である。検出した遺構は生活関連遺構のみで、甕棺等の墓地遺構はない。遺構面とした黄白色砂の上には土器を多量に含む黒褐色砂が厚く堆積しており、遺構はこの包含層から掘り込まれている可能性が高いが、平面・土層断面から明確には識別できなかった。遺物は土器のほかに石錘が多くみられ、漁撈的性格が窺われる。住居址8軒のうち確定なものはSC01・10・15の3軒で、残りは住居址としたものの不安が残る。SC01・10・15の3軒からはいずれも炉と思われる焼土が確認されたが、明確な主柱穴を検出することはできなかつた。

第22図は周辺の弥生中期後半の住居址をまとめたものである。第9次地点の南東隅に位置するものが径9.6mの大型円形住居址で、現在確認されている中では最も大きく、集落の中心施設と思われる。第16次地点には大型の住居址はないものの、住居址の密集度は非常に高い。第9次地点と第16次地点の中間近くに位置する本地点でも比較的密度は高く、周囲にはかなりの数の住居址が広がっているものと思われる。本調査の出土遺物は土器溜まりSX26のものが大半であったが、第8・9次調査でも土器溜まりが検出されており、大量の土器が出土している。第8次地点では南西隅の住居址の東側に2ヶ所、第9次地点では1区南端で確認されている。

今回は調査範囲が狭く、弥生集落の様相を明らかにするまでには至らなかつたが、先述のように周辺にも同程度の密度で遺構が広がる可能性が高い。また、遺構面までは現地表より2m以上あることから、後世の搅乱の影響が少なく周辺にも良好に残っているものと思われる。今後周囲の調査成果の蓄積により弥生中期の集落景観が明らかになることを期待したい。

第22图 张生中期后半住居址配置图 (1/500)





1. 1区全景（東から）



2. 2区全景（南から）

図版 2



1. SC01 (東から)



2. SC02 (東から)



3. SC04 (東から)



4. SC07 (東から)



5. SC09 (南東から)



6. SC10 (東から)



1. SC10遺物出土状況（西から）



2. SP16遺物出土状況（東から）



3. SC10完掘状況（東から）



4. SC15（西から）



5. SX26遺物出土状況（北東から）



6. 2区包含層遺物出土状況（西から）

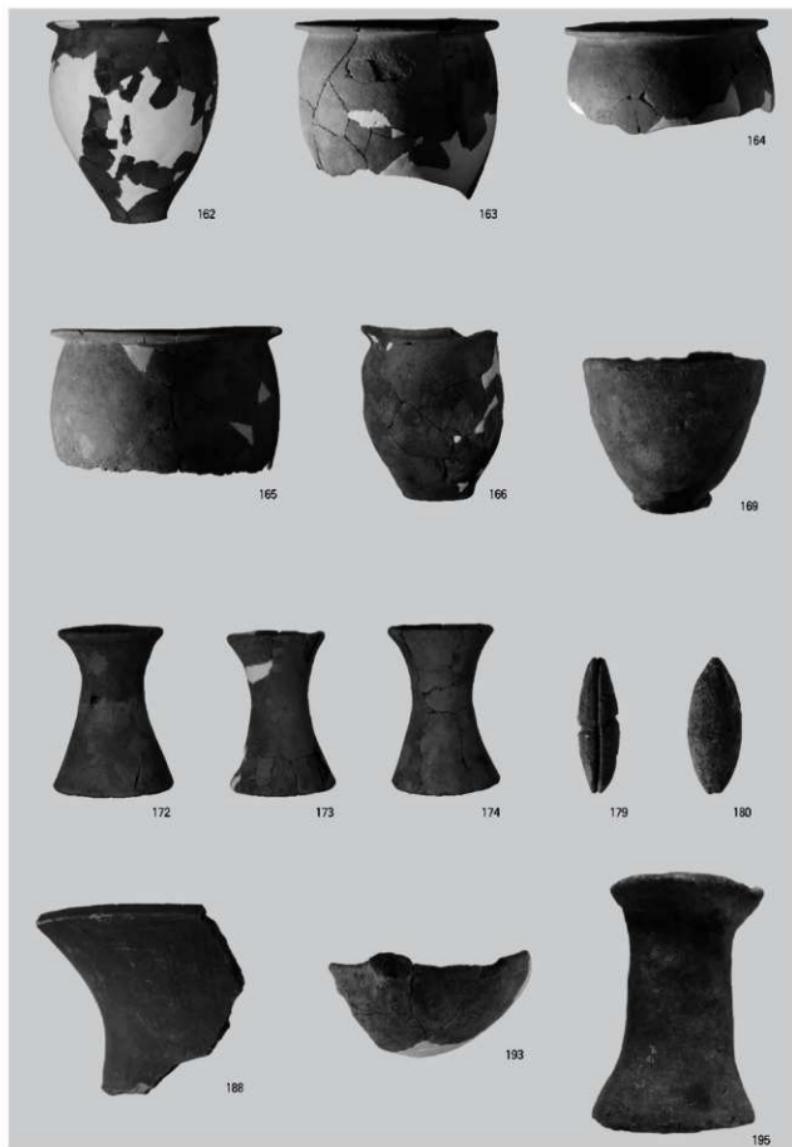
図版4



出土遺物 I (縮尺不同)



出土遺物 II (縮尺不同)



出土遺物Ⅲ（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	にじんまちいせき10			
書名	西新町遺跡10			
副書名	第19次調査報告			
巻次				
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書			
シリーズ番号	第984集			
編著者名	今井隆博			
編集機関	福岡市教育委員会			
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1			
発行年月日	2008年3月17日			
調査期間	2006年7月12日 ~ 2006年8月11日			
調査面積	163.48m ²			
調査原因	共同住宅建設			
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(世界測地系)
西新町遺跡 第19次	福岡県福岡市早良区 高取1-111、112	40137	0240	33° 34' 54" 130° 21' 13"
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
西新町遺跡 第19次	集落	弥生 近世	堅穴住居址8 土坑2 土器溜まり1	弥生土器 石器 陶磁器
				弥生時代中期の集落を検出。 狭い範囲ながら大量の土器とともに石錐・砥石・石斧が出土。近世高取焼窯遺物も出土。

西新町遺跡10

—第19次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第984集

2008年(平成20年)3月17日

発行 福岡市教育委員会
 福岡市中央区天神1-8-1
 印刷 久野印刷株式会社
 福岡市博多区奈良屋町3-1
 ☎ (092) 262-5726